主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	澁谷俊樹

主 論 文 題 名：

インド・西ベンガル州の祭礼をめぐる文化人類学的研究
―カルカッタの女神祭祀のネットワークを中心に―

（内容の要旨）

インド西ベンガル州都カルカッタのチェトラ地区の事例を中心に、担い手の異なる三種類の祭祀の変容について考察する。特にチェトラ市場を中核として、チェトラの領主であるアディ家のドゥルガー女神祭祀（3 章）と、チェトラ市場のカーリー女神祭祀（5 章）とガジョン祭祀（7 章）の民族誌を叙述し、それぞれの祭祀の変容について、英領期から経済自由化後の今日に至るカルカッタの周辺社会の変化の文脈を念頭に考察する。本研究の目的は、カルカッタにおけるこれら三種類の祭祀の動向を現地調査に基づいて明らかにした上で相互に比較し、これらの祭祀の構造を「秋の祭祀」と「春の祭祀」とに分けて対照した先行研究に本稿の議論を位置づけることである。

ドゥルガー女神祭祀は、西暦 9 月から 10 月にかけての陰暦白分七日目から十日目にかけて四日間行われる。カーリー女神祭祀は 10 月から 11 月にかけての新月の夜に行われる。ガジョン祭祀はベンガル暦の最終日にあたる 4 月 13 日か 14 日にかけて数日間行われる。三つの祭祀はいずれも農耕祭祀を起源に抱え、地域毎の王権や領主に関わる「ヒンドゥー祭祀」としての展開期をそれぞれ異なる時代に経た後、都市祭礼としての変貌を遂げている。このように表現すると、何れも同じ変化を辿ってきたような印象を与えるかもしれないが、これら三つの祭祀は、担い手となる民衆と大文字の歴史における位置づけが全く異なる。

ドゥルガー女神祭祀は王権や領主の宮廷祭祀から都市の町内会やクラブが主体となる民衆祭祀へと展開し、カルカッタを中心に東部インドを代表する祭祀となった［外川 1992; Rodrigues 2003; 八木 2010; McDermott 2011］。ドゥルガー女神祭祀は、毎年地元メディアからの脚光を浴びている。カーリー女神祭祀もこれと類似の歴史展開を辿るが、今日でもドゥルガー女神祭祀の「民衆」には、カーリー女神祭祀を組織する「民衆」の多くが含まれない。都市の中上流層だけではなく、ボスティ（スラム）の住民、果ては路上生活者まで幅広い「民衆」から底堅い人気を誇るのが、カーリー女神祭祀である。ガジョン祭祀はベンガルの代表的な村落祭祀である。カルカッタでガジョン祭祀を行う地域は稀であり、経済的には貧しい人々やボスティに暮らす住民たちの間で行われる。しかし本研究の主要な意義はむしろ、チェトラ市場という村落から都市へと包摂され、今日もこのガジョン祭祀とカーリー女神祭祀を共に大々的に行い、かつドゥルガー女神を奉ずる領主の所有地でもあった地域の祭祀のネットワークを焦点とすることで、ドゥルガー女神祭祀に代表される、都市の大文字の歴史の表舞台からは決して垣間見ることのできない、重層的な民衆文化の動態を描き出す点にある。「エリート」と「民衆」という二分法は、何れか一つの祭祀に限定しなければ分析概念としての有効性を保ち難い。

チェトラはかつて村落ではあったが、村落パンチャヤトが置かれたことはなく、社会組織はカルカッタの他の街区のそれと構成上全く変わらず、村落に見られる所謂「カースト社会」としての体をなしていない。チェトラ市場の祭祀が実際に有するネットワークは、特定の村落に向かうことなく、近隣社会の祭祀の動向を相互的に巻き込み地下茎的に張り巡らされている。

主　論　文　要　旨

第１章「ヒンドゥー祭祀研究」では、南アジアの人類学的な祭祀研究に本稿に論じる三種類の祭祀の研究史を位置づけ、祭祀の歴史展開を示した上で、本研究の論点を提示する。

第２章「調査地域」では、カルカッタの歴史と社会を概観し、定期市のある村落からアディ家の領地になり都市の中へと含まれたチェトラの歴史について説明する。カルカッタもグローバル化の影響下にある大都市であるが、人間関係は今日の日本の都市に見られるものとは大きく異なる側面がある。

第３章「ドゥルガー女神祭祀の伝統と近代」では、チェトラの領主となるアディ家が 19 世紀後半にこの地へと移住した経緯を記し、アディ家の宮廷で組織されるドゥルガー女神祭祀を記述する。アディ家のドゥルガー女神祭祀は彼ら自身が資金を負担する。かつてはチェトラの住民を祭祀に招いていたが、独立後の土地改革を受けて親族が離れて暮らすようになり、現在では祭祀の規模は縮小され、親族間でのみ細々と続けられている。これに対し、都市の町内会やクラブが委員会を組織することで運営される共同出資型の祭祀がカルカッタ各地で活況を呈している。この共同出資型の組織について、チェトラで最も古い共同出資型のドゥルガー女神祭祀運営委員会を事例に、組織構成や祭祀の費用を整理する。

第４章「ドゥルガー女神祭祀の変容―『テーマ・プジャ』の流行」では、経済自由化以降、とくに 1990 年代半ば以降にカルカッタ各地の共同出資型のドゥルガー女神祭祀に興隆し始めた流行について論じる。「テーマ・プジャ」とは、ヒンドゥーの「伝統的」な規則だけに拠らず、神像やこの像を祀る仮設寺院に異文化の要素などを取り込み、あるいは芸術的な「テーマ（Theme）」を設定することで、洗練されたデザインの仮設寺院や像を祀る祭祀を示す。今日のカルカッタでは、こうして毎年新たな「テーマ」を設定する都市中上流層の街区の祭祀運営委員会の祭祀の出来栄えを見ようと、祭祀の四日間に昼夜出歩く人々が増えている。本章では「テーマ・プジャ」の一例として、「チェトラ・オグロニ・クラブ」の事例を記述し、この流行に目をつけたメディアや企業が、知名度の高い祭祀運営委員会にトロフィーや賞金、広告掲載費などを贈与し始め、一部で祭祀のコマーシャル化が進行していることを明らかにする。

第５章「チェトラ市場のカーリー女神祭祀」では、まずチェトラ市場の社会組織と住民構成を整理し、聞き書きに基づいて地域史を記述する。続いて市場のカーリー女神祭祀の由来を説明し、祭祀当日に至るまでの準備を描いた上で、時間をおって儀礼の過程を記述する。市場のカーリー女神祭祀は、1977 年よりベンガル地方でもよく知られた型のカーリー女神を祀っていたが、チェトラ一帯で興隆し始めたカーリー女神祭祀の影響を受け、86 年よりポンチョムンダ・カーリーという見慣れない像が祀られるようになった。山羊の生贄が不可欠な「タントラの儀礼」が作られ、外部から招かれる「タントリック（タントラ行者）」の司祭に対して、市場に住む低カーストの住民が毎年「タントラ行者」に着替え、儀礼執行への「許可」を与えるという形式が構築されている。

第６章「カーリー女神祭祀の変容」では、こうして今日チェトラ北部のボスティ（スラム）を中心にローカルな盛り上がりを見せる「チェトラの様々なカーリー女神祭祀」の歴史展開について考察する。とくに「チェトラ商人組合」が祭祀期間に地域の路上に貼り出す地図に示された 40 件前後の多様なカーリー女神を祀る祭祀運営委員会について、3 年に亘り毎年聞き書きを行った資料を整理し、この資料に加えて、地域の歴史的地理的な変容も考慮したうえで、このローカルな変化を辿る。論旨を先取りすれば、チェトラ各地のカーリー女神祭祀は、東に隣接するカーリー女神の名高い霊場であるカーリーガート寺院や、その火葬場にやってきていたローカルな「サードゥー」や「タントリック」たちとの女神祭祀をめぐる住民のネットワークを背景として、なおかつ領主であるアディ家とは関わらない祭祀として始められた。当初の祭祀組織の大半は、チェトラでも比較的富裕な層

の住民たちであったが、1970 年代以降のチェトラ周辺でのインフラ整備が進み、近郊に地下鉄が開通し、カルカッタ中心部からの利便が良くなると、「多様なカーリー女神祭祀」の中核がチェトラ北部のボスティ（スラム）に移行し始める。更にドゥルガー女神祭祀のテーマ・プジャの影響も波及することで、独自の儀礼を構築しようとしていた「サードゥー」や「タントリック」たちの意向とも関わらない地域の政治家や占星師が、それぞれの目的でチェトラ各地のカーリー女神祭祀に関与を始め、錯綜した意図が飛び交う状況が生じている。

第７章「チェトラ市場のガジョン祭祀」では、組織構成と祭祀の「由来譚（Utpatti：Origin）」を整理した上で、邦語初となるガジョンの民族誌を詳述する。イギリス政府がガジョンに伴う「鉤吊」を法律で禁止した 1894 年の翌年に、市場の住民たちはよりによってガジョンを開始している。現在のガジョンの主神は、シヴァ神とその妃の女神であり、村落のガジョンにおいてそうであるように、市場でもバラモンの司祭だけではなく、不可触民を含めた多様な住民たちが中核的な儀礼的役割を担う。まず現在の祭祀の担い手への聞き書きに基づいて祭祀を分析することで、市場のガジョン祭祀が「地域化」された解釈を有することを確認する。このことは、五日間の日程の「各日の儀礼毎に由来譚が分岐している」ことから即明らかになる。その上で、周辺社会の文脈も考慮し、具体的にどのような背景からこれが分岐するに至ったのかを問う。ポイントは、由来譚に登場する「鰐」と「鳶」である。第一は「鰐」に関する。市場のガジョンで一世代前に司祭を務めた人物の語りに注目することで、今日市場で知られる分岐した由来譚とは異なる「一貫した」解釈があることを示す。その上で、この司祭と市場の住民との関係性から、異なる解釈が生じた要因を考察する。ただし、ここで司祭の解釈を「本来の解釈」とは見做さない。第二は「鳶」に関する。市場のジャンプ儀礼の由来譚には鳶が登場する。次章で論じる通り、市場と同日程のガジョンはカルカッタ各地に少なからず存在するが、市場のように鳶の登場する由来譚は得られない。一方、資料調査の面から、カルカッタの南に隣接する県の村落のガジョンの記録に、ジャンプ儀礼の前に鳶が飛来する口承が二件得られることを確認し、これを市場の資料と比較し、市場の住民が、何を企図して、何を素材として、どのような手法で、「地域化」した解釈を構築したかを考察する。

第８章「ガジョン祭祀の歴史と変容」では、３年に亘るチェトラ市場でのガジョンの調査によって、市場を含めたカルカッタ各地のガジョンには、実はジャンプ儀礼の前にカーリーガート寺院のカーリー女神への「花添え儀礼」を行うネットワークが見出されることを明らかにし、これを皮切りとして、このネットワークが、草の根的に形成されたのか、寺院側からの企図で形成されたのかを考察する。これにあたり、カルカッタ各地のガジョンの現状と、過去にカルカッタで組織されていたガジョンの記録を検討することで、チェトラ市場のガジョンの構成と、近隣地域のそれにどのような相違があるのか、また、いつ頃からカーリーガート寺院近郊でガジョンが組織され、神格の中核がシヴァ神やその妃へと変化していたのかを具体的に検討する。その上で、カーリーガート寺院での花添え儀礼において重要な役割を担うバグディ・カーストの動作に着目し、イデオロギー分析の観点から花添え儀礼からジャンプ儀礼に至る一部始終を再検討し、女神への花添え儀礼のネットワークが誰によって構築されたものであるのかを問う。

第９章「結論」では、ドゥルガー女神祭祀やカーリー女神祭祀などの「秋の祭祀」とガジョン祭祀という「春の祭祀」の構造を、「供犠的政治性のヒエラルヒー」と「共同体の平等主義」というコントラストから理解しようとした研究［Nicholas 2013］に対し、何れの祭祀にも地域・時代毎に異なる仕方で、ヒエラルヒー、イデオロギー、平等性の軸が同時潜在することを論じる。